

## 三宅 秀とその周辺

日本医史学雑誌第五十一巻第三号 平成十七年七月二十日受付  
平成十七年九月二十日発行 平成十七年八月三日受理

佐々木 恭之助

東北電力(株) 常務取締役

〔要旨〕 三宅秀の四女・菊尾は、筆者の祖母で、筆者は秀の外曾孫にあたる。その縁から、先の第一〇六回日本医史学会学術総会で筆者は標題のごとき招待講演を行った。本稿はその内容を記したものである。

秀は一八四八年、三宅良齋の長男として生まれ、名は復一と称した。幼い時より良齋の熱心な教育方針に従い、英語、物理、化学、医学を学んだ。一八六三年、十五歳の時遣欧使節団の一員として渡欧。その際スフィンクスで撮った写真は有名である。秀は一九三八年、九十歳で没した。本稿では、秀が少年時代に生きた社会背景、学問修得の過程、その交友関係、そして明治維新後の秀の学問や、生涯などについて述べてある。これらは親族の三浦義彰の提供する資料、そのほか種々の文献から、外曾孫として筆者なりに、秀の人物とその周辺の様相を綴ったものである。加えて筆者が独自に作成した秀の略歴年表と、系図も付した。

キーワード——三宅秀、三宅復一、三宅良齋

## 一、はじめに

はじめに当り、三宅秀（ひいず）と私の関係について簡単に説明しておきたい。

三宅秀（一八四八―一九三八）は、二男五女の子女（長子の男子は夭折）を持ったが、四女の菊尾が私の祖母であるので、秀は曾祖父ということになる。しかし、私の誕生前にこの世を去ったので、直にあつたことはない。

親類縁者には、秀の長男・三宅鑛一と仁の親子を始め、秀の長女、教（おしえ）の夫である三浦謹之助とその次男義彰親子、秀の孫娘昭子の夫である島菌順雄とその父順次郎親子、順天堂の佐藤泰然、秀の妻藤（ふじ）の父である佐藤尚中、その養嗣子進、さらに達次郎、秀の妹峯（みね）の夫で杏雲堂の佐々木東洋、その養嗣子の政吉、さらに隆興、といった医師が数多くいた。その中で、私の生家である佐々木の家は医学とは無縁であつた。が、祖母や父が自分でガンを早期に見つけ、完治に繋がつたこと、父が良く医学書を読んでいたことなどは、医者の血が騒いだ結果だつたのであろうか。

秀については、私は以前から詳しく知っておきたいと思い、三宅一族の集まり「桔梗会」で小父小母たちの話に耳を傾けたり、亡父にも折あるたびに質問したりしていたが、なかなか全貌に迫れないままだった。外曾孫の一人が同じ気持ちでいたとみえ、先年、一念発起し、「三宅秀とその周辺」という表題で『桔梗』という本を編纂してくれ、漸く長年の思いが叶つたところであつた。

『桔梗』には今般の第一〇六回日本医学学会学術総会で私の講演の座長を務められた酒井シヅ教授が「良斎と秀」という題で論文を寄稿して下さっており、思いがけない縁を感じている次第である。

ここに述べることは、既知の事実も多々あろうかと思うが、私としては、先祖のことをより多くの方に知っていただくまたとない機会と考え、今般の招待講演をお引き受けしたわけである。

私は医学については門外漢の人間であるが、親族の一員としての立場から、以下、今に残っている秀の講演記録や、上述の『桔梗』、また秀の日記をもとに三浦義彰小父がまとめた『文久航海記』、義彰小父が色々ところで書き表しているエッセイ、さらに作家鈴木明氏が著した『維新前夜―スフィンクスと三十四人のサムライ』等を参考にしながら、三宅秀の少年の頃の事跡や生きた時代の空気などを中心に、話を進めていくことにしたい。

## 一、少年、三宅秀が生きた時代と環境、そして秀をめぐる人々

### 秀とスフィンクス

十五、六年前のことになるが、TBSの「新世界紀行」という番組で、「スフィンクスに上った三十四人のサムライ」というドキュメンタリーが放映された。

一八六四年四月四日、和暦では元治元年二月二十八日、一行三十四人の内、二十七人のサムライがスフィンクスを見、その前で日本人として初めて写真を撮り、その中の何人かはスフィンクスの首の辺りに登ったという史実がある。この後にも先にも例がない経験をしたのは、三年前に開港したばかりの横浜を開鎖する交渉のため、文久三年(一八六三)十二月から元治元年(一八六四)七月にかけて、ヨーロッパに派遣された幕府の第二回遣欧使節団一行(正使・池田筑後守)であった。スエズ運河が開通するのは一八六九年のこと、これ以降はカイロを経由しないでもヨーロッパに抜けられるようになるので、こういう幸運を射止めることができたサムライは、結果として他にはいない。

この史実を中心テーマとし、一行の日記をもとに当時を再現したのが、前述の番組だったが、主人公の一人が三宅秀、当時の名前で復一(またいち)である。復一はこのとき一行最年少の十五歳で、鈴木氏の著書に「スフィンクスの首に上り、すべり落ちて、影だけが写っている」と書かれたのが、復一だったようだ。

復一は、初めてカレーライスという食べ物を見た日本人でもあったそうだ。この話と同じ航海のことで、食の分野では有名な話である。船中でインド人が食べているものを見て、「飯の上にトウガラシ細身に致し、芋のドロドロのようなものをかけ、これを手にて掻きまわして手づかみで食す。至つて汚き物なり」と復一は書き残している。

### 時代背景

この時期は、明治維新を五年後に控え、勤王だ佐幕だと、大層物騒だったが、渦中の地域や人を除けば、進取の気性に富んだ人材にとつては誠に面白く、どのようなことでも成し遂げられそうな良い時代でもあったようである。

江戸時代も後期に入ると、町人なしには経済が回らない状況になり、思想面でも町人道德の有りようを説く心学が石田梅岩によつて唱えられ、自然科学でも関孝和の和算、宮崎安貞の農学、稲生若水の本草学などは、いずれもこの時代に生まれた。幕府の弾圧の中でも衰えず、益々盛んになったのが蘭学であることは、改めて述べるまでもない。

幕末には多くの若者が国禁を犯して海外に雄飛した。出国に失敗した吉田松陰などの例もあるが、出国に成功し、帰国後、倒幕の中心となった高杉晋作、伊藤博文、井上馨の例など、枚挙にいとまがない。また、米、英などと国交が開かれた後は、幕府や各藩からかなりの数の公式使節団や留学生たちが、欧米に派遣されている。

旧来の陋習にとらわれない町人の活動を中心に生まれた進取の気性や自由な発想に触発され、また欧米から入ってくる新しい知識に心を揺さぶられる、といったこの時代の風潮は、これから見ていく曾祖父秀やその父、良斎（ごんさい）の当時の生き様に限定しても如実に現れている。そして、成熟した町人経済を基盤として、サムライをはじめとする幕末の日本人が新しい学問や知識に対して有した貪欲なまでの意気込みが、間違いなく近代日本を築き上げた原点になっていると、私は考えている。

## 父・良斎と復一に対する教育

さて、三宅のことに戻ると、良斎はその祖父玄碩、父英庵と代々、島原で漢方の医業に携わった家に生まれたが、四男だったこともあり、父の死後、長崎に出て、榎林流という医道を開いた名家の出でシーボルトの門人榎林栄建の門を叩いた。そこで良斎は蘭方医としての腕を磨き、同門の和田泰然（後の佐藤泰然）の誘いを受けて、江戸に上り、泰然が両国橋に近い元柳橋薬研堀に開いた和田塾に加わり、自らも近所で開業することとなる。

良斎はオランダ語は得意だったようであるが、江戸に戻った後で、コレラの治療法を聞きにフランス人軍医を訪ねた時も、また出府してきたシーボルトを訪ね収集した鉱物や植物の鑑定を依頼した時も、そのオランダ語がさっぱり通じないことに愕然としたようである。そして、復一（秀）を伴った横浜見物の折、イギリス人と話をし、「これからは英語だ」と悟り、復一に英語勉強の機会を与えようと考えた。復一、十二歳のことである。そこで、万延元年（一八六〇）、砲術で名高い高嶋秋帆が小石川小十人町で開いていた兵学塾を選び、復一を住み込ませ、秋帆の孫、太郎から英語を学ばせることとした。

「攘夷一辺倒の時代、子供でも蘭学塾に通う者には危害が及ぶ恐れがあるので、兵学塾を選んだようだ」と私の小父・義彰はあるところに書いている。復一本人は、大正十五年十二月二日に開かれた維新史料編纂会の講話で「亡父（良斎）の考では、自分の倅を生意気にならぬように余程心配したことと見えます。その当時の江戸若者の風がはなはだ面白くございませぬから若い者を育てるのに苦心を致しまして、高嶋家のような厳格な所へ預けましたのであります」と述べている。当時の事情からすると、そのいずれもが高嶋塾を選んだ理由だったであろう。良斎は、今日であれば、教育パパと言われかねない程の教育熱心な人で、復一は、すでに六歳のとき近所の師匠について習字を習わされ、十歳になると塾に通って、漢籍やオランダ語の初歩を学んでいる。

文久二年（一八六二）、兵学塾が火事で焼け、英語を習っていた高嶋太郎が流行病のコレラで急死すると、良斎

は復一を家に戻し、自らの患家で友人でもあった田辺太一の紹介で、英語通訳では当時、第一級の人物だった立石斧次郎の上野広小路裏手の下谷七軒町の塾に息子を、こちらにも住み込みで預けることとした。

立石は、別名米田為八、またの名を長野桂次郎といい、トミーの愛称で知られる人物である。下田のアメリカ領事館でハリスやヒュースケンのボーイをし、万延元年（一八六〇）の遣米使節一行には通訳として参加したこともある英語通で、住み込みの塾生には一切日本語を使わせなかつたそうだ。外国語について、良斎は「読めればよいというのではだめで、きちんとしゃべれなければ、それも発音、アクセント、イントネーションなど、をきちんと学んでいなければ意味がない」ということを、復一にしきりに言っていたようである。

先に触れた田辺太一は、当時、幕府の外国奉行支配調役並を務める外交官で、立石斧次郎の居宅の隣に住んでおり、両家は行き来自由の状況だったので、復一は田辺家にも頻繁に出入りしていたとのことである。のちに、田辺が第二回文久遣欧使節団の中心メンバーに選ばれることとなると、この行き来の折の好印象のおかげもあって、復一は田辺の従者として一行に参加することを得たのだから、世の中のめぐり合わせというものは、分らないものである。

良斎の教育熱心さは、復一が帰国した後も変わらず、佐藤泰然の勧めもあって、復一をアメリカ宣教医ヘボン（現代語読みでは「ヘップバーン」か）等が教師を務めていた横浜の英学校に入れる。復一は英語修得の傍ら、ヘボンの診療所にも通い、医療の勉強もすることとなるが、良斎はヘボンの専門が眼科で、臨床医学の面ではあまり役に立たないと見てとると、そこを去らせ、医学を学べる所としてアメリカ海軍の軍医アレキサンダー・M・ヴェッダー（当時は「アレクサンデル・M・ヴェッデル」と呼ばれた）の助手にしてみらう。ここで足かけ三年間みっちりと仕込んでもらったことが、のちに医師、医学者として復一が大成する基盤を形成したようである。

慶応三年（一八六七）、ヴェッダーが長州に招かれ横浜を去るときには、復一も同行しないかと誘われるが、良斎も復一も朝敵となることを嫌い、それを断り、またこの誘いに続く幕府からの誘いも断り、安全第一とばかり、

金沢の加賀藩藩校の翻訳係に就職させている。確かに、時代を見る目が備わっていたのだろうが、教育ババもここまで来ると、筋金入り、今日の我々から見ても脱帽の感がある。

金沢赴任に際して、復一は貴重な洋書を僥倖にも手に入れることができた。これがその後金沢に英学校を興すことにつながる。すなわち、折柄、幕府の洋書調所が種々の教科書を英国から取り寄せていたが、これらが江戸に到着した度その時、幕府は瓦解し、これらの洋書は宙に浮きかかっていた。このことを憂いた田辺太一が良斎に相談したことから、復一が金沢藩と交渉し、入手することを得たもので、福沢諭吉の慶応義塾も欲しがったが、復一の話が先口だったので、金沢藩に落着いたと、復一は「三宅博士談話速記録」(『加越能時報』所載)の中で述べている。

こうしたいくつかの経緯を経て、復一は、藩校の英学校で藩士の子弟を教えることとなる。このときの弟子には、高峰讓吉(薬学者)、瓜生外吉(海軍大将)、石黒五十二(工学博士)、桜井錠一(理学博士、のち帝国学士院長)等がいる。

良斎自身についてみてみると、彼はとても好奇心が強い男だったようである。たとえば、漂流民で幕末に帰国したジョン万次郎に写真を撮ってもらったり、万次郎が捕鯨船の試運転をする時にもこれに同乗してもらったりしているし、あらゆるつてをたどり、葉草や鉞物を収集したり、佐倉の堀田侯から測量器や蒸気船の模型を借り、自宅で使ってみたり、大金を投じてフランス製の風雨計を買ってみたり、そして護身用に手に入れた六連発銃の弾を自分で作ってしまったりもした。その好奇心は留まるところを知らない。

復一もまたこの性格を色濃く受け継いでおり、加えて大変な保存癖があった。これらの性格は祖母、父を経由して、私にまで間違いなく繋がっている。

### 良斎・秀の遺品

集めた鉞物や植物のことで補足しておこう。良斎はシーボルトに標本の鑑定を依頼したが、先に述べた通り、言

葉が上手く通じなかつたためか、あるいはシーボルトが意図的に分らない振りをしたのか、はつきりしないが、シーボルトは預かつた標本をすべてヨーロッパに送つてしまい、返してくれなかつたので、復一がパリに赴いた折に、掛け合つてその一部を返してもらつたということもあつたようだ。

良斎や秀が集めた各種のコレクションは、最近になつて三宅家から東京大学医学部に寄贈された。その一部は小石川植物園の中にある東京大学総合研究博物館小石川分館の二階に医学関係コーナーを設け、陳列されており、私も昨年春、訪ねてきた。その折の館員の方の話では、未整理の物も多く、分類、整理などが進むにつれて、展示は増えるとのことだつた。その後、昨年夏には、書簡、文書類を除き、一応の整理が終了したようで、三宅コレクションの総目録(一)ができ、私も一冊寄贈を受けた。これらのコレクションが医史学の研究にながしかの材料となるのであれば、喜ばしいことである。

#### 遣欧使節団と復一

話を遣欧使節団のことに戻すこととする。復一が参加したこの使節団には、幕府における当時、最高の知識人達が多数参加していた。上海、香港、サイゴン、シンガポール、セイロン、カイロ、マルセイユ、そしてパリと旅を重ねる中で、復一は、以前からの顔なじみとも、初顔合わせの者とも、大変親しくなり、帰国後、それぞれ、要職を歴任する間も交誼を絶やすことはなかつたと述べている。

次に維新前の若者たちの交友について述べよう。三宅復一は、高嶋塾にいた頃、すでに秋帆のもとに良く出入りしていた田辺太一とその兄・藤次郎、原田敬策、西吉十郎(長崎の通詞、のち西成度、司法官)、福沢諭吉などと旧知だつた。田辺、原田、西の三人はのちの遣欧使節団の仲間でもある。父良斎の学塾には、細川潤次郎、福地源一郎(のち桜痴)、箕作秋坪らも訪れており、彼らとも面識があつた。



また、立石斧次郎の塾に住み込んだ頃には、これも遣欧使節団で一緒になった益田進、尺（せき）振八、矢野次郎兵衛の三人と、彼らが以前から立石の弟子だったこともあり、親しく交わった。三人は、外国奉行所に勤め、ハリスの下田領事館にガードマンとして派遣されたとき、その以前から通訳として勤めていた立石斧次郎に会い、師事した。ハリスが帰国すると、立石をはじめ、揃って領事館をやめることになるが、三人は頼み込んで、横浜運上所（税関）に勤め、立石の塾にも通ってきていた。

尺は、医師の子ながら政治を志し、信じられないほど博学だったという。矢野は、ちゃきちゃきの江戸っ子。益田は、父が代々佐渡奉行に仕えていたが、雄飛したいと江戸に出てきたことで、進本人もチャンスをつかんだということのようにだ。立石塾には、津田梅子の父としてのちに有名になる津田仙（農学の権威となる）も通っていた。ヘボン塾では、林董三郎、高橋是清、大鳥圭介、安藤太郎、沼間守一、益田進、弟の克徳、乙骨綱三などと同学だったり、知り合ったりした。復一は、使節団で初めて顔合わせをしたときには、旧知のものが大勢いて、さすがにびつくりしたが、「とても気が楽になった」とのちに述懐している。

団員の何人かについて、維新後の活躍ぶりにも触れてみよう。田辺太一はその後も外交畑で活躍し続け、一例を挙げれば、明治四年からは岩倉大使一行の世界一周視察団に書記官長として参加している。田辺の娘（龍子、のち花圃と号す。近代女流小説家第一号。同門の樋口一葉は花圃の成功を見て作家となったという）の夫は、思想家の三宅雪嶺、そのまた娘婿が政治家で昭和史の一面を彩った中野正剛である。

原田敬策（遣欧使節参加に際し吾一と改め、のち一道）は、高嶋秋帆塾で復一と旧知の間柄であった。岡山の名な医者の子息であったにもかかわらず、兵学の道を進み、大村益次郎と共に、日本陸軍の祖となった人である。西園寺公望の秘書で『原田熊雄日記』を記した原田熊雄はこの吾一の孫になる。

山内六三郎は、良斎が日本で初めて鞏丸摘出手術を行ったとされる山内豊城の子息で、復一とは後に縁戚になる

人。榎本武揚の脱走軍に参加、のち許されて、岩倉使節団に参加、鹿児島県知事、官宮八幡製鉄所初代長官などを歴任した。父豊城には『玉とり日記』という著作があり、手術の模様の記録が今に残っているとのことである。

先にも触れた益田、矢野、尺の三人もそれぞれ、明治に入って活躍する。益田進（のち孝、鈍翁と号す）は、三井物産初代社長となり、古美術の収集でも知られる。矢野次郎兵衛（のち二郎）は、一橋大学を創立し、初代校長になった。尺振八は、共立学舎を興し、自由民権運動を続けたが、若くして亡くなった。そのほかにも、各方面で活躍した人達が多数加わっていた。

これらの幕臣達は、志す道はそれぞれ異なっているが、欧米から入ってくる新しい知識の吸収に貪欲で、それらを吸収できる人物や場所を探し、群がったため、知友の環は我々の想像以上に広いものだったようである。そういう実際の結果、彼らの間では縁戚関係も複雑に形成されていた。そのことは彼らの系図を並べてみるとよく分る。たとえば、幕府からのオランダ留学生で復一がパリで再会した林研海と都合がつかず、パリでは逢えなかった榎本武揚の二人は、復一の妻・藤の父である佐藤尚中の縁から、のちに縁戚になるという具合である。

こういった事柄も含めて、鈴木明氏はその著『維新前夜』の中で、「多くの新しい資料が明らかにされ、更にそれを分析、検討してみると、百二十余年前のサムライたちが驚くべき国際感覚を持ち、信じられないほどの柔軟な頭で、それを咀嚼していることが、いまやわかるのである」と記している。

その中でも、渡欧の最初から亡くなるその瞬間まで、一途に中国との協調を理想とし、そのため奔走し続け、ついに目的を達することなく、人知れずこの世を去った名倉予何人という人に、私個人としてはとても心を惹かれる。明治の代となり、市井にひっそり籠もっていた名倉に偶然出会った復一が、その後も明治の中頃過ぎまで名倉との交誼を続けていたことも、私の興味を抱く理由の一つかもしれない。

いずれにしても、これまで見てきたように、復一が刺激の多い家系や環境の中で思いっきり好奇心をかき立て、

知識を吸収し、成長していったことだけは間違いないところで、良齋の目論見はまさに的を射たというべきである。繰り返すが、こういった状況は、この時代の知識人には多かれ少なかれ普通に起きていたことだった。そのことは、何人かの同行者について先述したことから容易に想像がつくことであろう。

江戸時代の終盤期から明治のはじめにかけての我が国は、沸騰したやかんの中、あるいは熱しきったマグマの中のような状況にあったといつてよい。大勢の人々が、そのマグマに押し出されるように時代の最先端に出て行き、その中で、どれほど多くの人が後世まで喧伝されるほどの榮譽を受け、またそれらに倍するほど多くの人々が手痛い挫折をし、歴史の裏面にかき消えていったことか。にもかかわらず、おそらくはそのいずれの人々も、自らを面白い世を生きたと思いつつこの世を去ったのではないか、と私は感じずにはいられない。

### 三、三宅秀のその後

#### 秀と東京大学校

明治維新によって、それまでの立場が逆転し、歴史の表面から消えかかっていた旧幕臣達に光が当たり始めたのは、明治二年の半ば過ぎの頃からだった。それは、先にも触れたように、時代の熱気に押され、深い知識と高い技術力を身につけた旧幕臣のエリート達を無為に過ごさせておくもつたいなさに、早くも明治新政府が気付いたかのような、あわたたしい変化だった。

「秀(ひいず)」と名前を変えていた三宅秀にも声がかかり、東京大学校の中助教に任命されたのは、実に明治三年(一八七〇)十月のことだった。以降のことは、もはや多言を要さない。

## 秀の学問

秀は、明治二十三年（一八九〇）、四十二歳の若さで医科大学長を辞任し、貴族院議員に列せられるが、明治三十六年（一九〇三）に東京帝国大学教授を退官してのちは、衛生思想の普及啓発活動を熱心に行い、学校衛生の整備にも力を入れ、その組織づくりに尽したそうである。酒井シヅ教授もそのような趣旨のことを前述の『桔梗』に書かれている。

その後、秀は七十七歳を期に一切の公職から離れ、昭和十三年（一九三八）九十歳で死去するまで、悠々自適の生活を過ごした、と私は父や義彰小父から聞いている。ただ、その間どのような心境に達していたのかは、一番身近にいたはずの三宅の典次小父も義彰小父も聞くことがなかったようで、今に伝わってはいない。

秀は公職から離れるまで、臨床医師として人の病気を治すことに一生をかけたというよりは、社会とのつながりの中で医学を捉え、公衆衛生、飲食と薬品が人に与える影響、貧民救済制度、伝染病予防、都市の汚水処理、大学の医学組織、国民保健に果たす体操の意味、地方病の研究、そして医史学の研究などなど、実に幅広い分野に目を向け、研究、提言をし、医療制度の充実に向け、努力を重ね続けた。「医政」という言葉があれば、それが一番ふさわしい、と思われる活動をしたのではないかと、門外漢ではあるが私は考えるのである。

次に、この間の秀の活動について、生化学を専攻した三浦義彰小父の示唆によって知りえた二、三の事柄を示しておこう。その一つは、秀が生化学の分野でも重要な役割を果たしたということである。

秀は東京大学医学部長であった明治十六年（一八八三）、『東京化学会誌』と『東洋学芸雑誌』に「化学ト医学トノ関係ヲ論ス」という一文を発表している。道家達将氏によれば、それは「西欧における化学の発達史、化学の医学における効用を紹介し、レビュー（筆者注：Tiebig独ギーセン大学教授、一八〇三〜七三）を論じ、化学を発達させる必要を説き、それを日本においていかに実用するかを論じた」ものだったという。この論考の最後で、

秀は「今余輩ノ専ラ攻究スル所ハ化学ヲ応用シテ医学ヲ推進セシムルニ在リ」また「吾カ東洋地方ノ草木金石ニ就キ之カ分析ヲ為シテ其利用危害ヲ知ラシメナハ単ニ医学ヲシテ進歩セシムルノミニ非スシテ一ハ東洋学芸ノ進歩ヲ世ニ表スルニ足ルヘク、一ニハ大ニ国家ニ裨益スル所アルヘシ」とまとめているそうである。

道家氏によれば、秀が提唱した第二の問題、すなわち、「東洋地方ノ草木金石ニ就キ之カ分析」云々の問題は、その後薬学を中心に具体化されるが、こちらが生化学の方向に必ずしも進まず、「有機化学的研究が活発であったのに比し」、第一の問題、すなわち「医学部門での化学の導入は、当初から、そして時を経るに従っていつそう、生理化学的色彩の強い研究が主流を占めて発展した。これには、生理学者の大沢謙一、病理学者の三宅秀の積極的努力に負うところが大きいと思われる」ということになる（詳しくは上代皓三編『近代の生化学』所収の道家達将「黎明期の日本の生化学」参照）。

また、秀は漢方や鍼灸についても理解を示し、「反古にすることなく活かすべきだ」などと提言した。そして福沢諭吉あたりから「君の父上は漢方と戦った人なのに、その息子が漢方を薦めるとは不可解だ」と言われたりしている。

二つ目は、この鍼灸に関係する事柄である。この分野については、最近、石川県立盲学校の松井繁氏がその著書で次のような事実を明らかにしている。すなわち①廃止の憂き目に遭いそうになった鍼灸教育が明治二十年（一八八七）、訓盲啞院教授囑託だった奥村三策の呼びかけに呼応した三宅秀帝国大学医科大学長ほかの働きで再開できたこと、②明治二十四年（一八九一）、東京盲啞学校の卒業生で全盲の富岡兵吉が帝国大学医科大医院に初めて採用されたことにも秀が関与していたらしいこと、③奥村三策が心血を注ぎ編纂した鍼灸・按摩関係の多数の教科書の校閲にも秀が関係していたこと、などである。なおついでながら、秀の娘婿になる三浦謹之助も鍼灸法については並々ならぬ関心を寄せており、明治三十七年（一九〇四）頃から奥村三策の協力を得て、鍼の研究を行い、同三十九年、第二回日本連合医学会において「鍼灸法について」という講演を行っている（松井繁『近代鍼灸教育の父

―奥村三策の生涯〕。

秀が、このように幅広い分野に目を向け、そのいずれにおいてもなにがしかの成果に結びつけることができた源には、早くから海外事情にも通じ、幅広い人士と交際を重ねた中から生まれた自分なりの職業観とか人生観めいたものがあつたのではないかと私は考えている。

### おわりに

カレーライスのことは冒頭でも触れたが、秀は他にもヨーロッパで目にしたいいくつかの食べ物を日本に紹介しようだ。五女八重の嫁ぎ先、日本橋「椿原」の中村家の縁戚だつた風月堂にカルルス煎餅やウエファースなどを紹介した、とは中村正男小父や義彰小父の話である。当時、ウエファースの新聞広告には「医学博士・三宅秀先生の指示を仰ぎ御試験を請い」云々などと記してあつた。そして、衛生ボーロなどの菓子づくりも手伝つたという。いずれも悠々自適の生活の中でのことである。

こう見てくると、いまだ若輩の私など思いもつかないような心境で一生を送つたに違いないと、わが曾祖父ながら、半ば畏怖、半ば尊敬の念が湧いてくるのである。

このような思いを持つことができたのは、今回の講演を機に、改めて、種々の記録を探し、それらに目を通した結果であり、私個人としてもまことにありがたく思う。招待講演に私を指名した小曾戸洋氏（義弟）に心から感謝するとともに、周知の事実を中心とした話にも拘わらず、最後まで耳を傾けてくださった当日の参席者には深甚なる謝意を表したい。なお、三浦謹之助や順天堂、杏雲堂関係者については、時間の関係もあり、触れることができなかったことをご容赦願いたい。末尾ながら、貴重な資料や写真を快く提供され、かつ的確なアドバイスをされた三浦義彰小父に感謝の意を捧げる。

## 付、三宅秀略歴 (三宅家蔵本等を基に作成)

一八四八年 (嘉永一) 江戸本所緑町で良齋長男として出生。復一と命名。

一八五四年 (安政二) 六歳 読書、習字を近沢良之助、奥御祐筆斎藤三弥に学ぶ。

一八五八年 (安政五) 十歳 杉竹外に漢籍を、川島元成に蘭書単語、会話、文典を習う。

〈五月神田お玉ヶ池に種痘所設立。日米通商条約調印。翌年神奈川、長崎、箱館開港〉

一八六〇年 (万延一) 十二歳 高嶋秋帆の塾に入り、秋帆孫、太郎に英語、歴史、究理書 (物理)、舎密書 (化学)

を習う。刑屍について解剖見学も数回。

一八六二年 (文久二) 十四歳 正月、高嶋塾が焼失、一時手塚律蔵の塾で英語を学ぶ。師太郎がコレラで死去。自宅

で英語学習、解剖、生理、薬剤及内科学を自修。その後、田辺太一の紹介で立石

斧次郎の塾に住込み、英語を習う。

一八六三年 (文久三) 十五歳 十二月第二回遣欧使節団 (正使池田筑後守) に随員として参加。

〈七月薩英戦争、八月薩会の政変、七卿の長州落ち〉

一八六四年 (元治一) 十六歳 二ヶ月パリに滞在、七月帰国。帰途、マルセイユでシーボルトに会い、標本返還を

要請。

〈七月禁門の変、八月第一次長州征伐〉

一八六五年 (慶応一) 十七歳 横浜のヘボンの英学校 (のちの明治学院大学) に入る。傍ら彼等の診療所に通うが、

物足りず、ヴェッダーに師事、三年を過ごす。

〈十月条約勅許、翌慶応二年一月薩長同盟成立、同年將軍家茂死去、孝明天皇薨去〉

一八六七年 (慶応三) 十九歳 九月加賀藩壯猶館の翻訳方に登用、金沢に赴任。

〈二月徳川昭武らパリ万博へ、十月大政奉還、倒幕密勅、十二月王政復古の大号令〉

一八六八年 (明治一) 二十歳 九月金沢致遠館で英学三等教師を拝命。英学、算術を教授する。

一八七〇年（明治三） 二十二歳

一八七一年（明治四） 二十三歳

一八七二年（明治五） 二十四歳

一八七三年（明治六） 二十五歳

一八七四年（明治七） 二十六歳

一八七五年（明治八） 二十七歳

一八七六年（明治九） 二十八歳

一八七七年（明治一〇） 二十九歳

一八七八年（明治一一） 三十歳

一八七九年（明治一二） 三十一歳

一八八〇年（明治一三） 三十二歳

一八八一年（明治一四） 三十三歳

一八八二年（明治一五） 三十四歳

一八八三年（明治一六） 三十五歳

一八八四年（明治一七） 三十六歳

一八八五年（明治一八） 三十七歳

一八八六年（明治一九） 三十八歳

一八八七年（明治二〇） 三十九歳

一八八八年（明治二一） 四十歳

一八八九年（明治二二） 四十一歳

一八九〇年（明治二三） 四十二歳

一八九一年（明治二四） 四十三歳

一八九二年（明治二五） 四十四歳

一八九三年（明治二六） 四十五歳

この間、「治療通論」を著し（明治一五）、東京大学医史科にて「医史医学通論」や「西洋医学史」を講義（明治一六）、  
 剣術、柔術を体操に加えるべきかの協議に参画（同年）、相馬誠胤の精神病真否鑑定にスクリバ、原田豊と共に参画（明  
 治一七）、脚気病審査委員長（明治一八及二〇）、学生生徒体格検査委員長（同年）等歴任。

一八六九年（明治二） 二十一歳

一八七〇年（明治三） 二十二歳

一八七一年（明治四） 二十三歳

一八七二年（明治五） 二十四歳

一八七三年（明治六） 二十五歳

一八七四年（明治七） 二十六歳

一八七五年（明治八） 二十七歳

一八七六年（明治九） 二十八歳

一八七七年（明治一〇） 二十九歳

一八七八年（明治一一） 三十歳

一八七九年（明治一二） 三十一歳

一八八〇年（明治一三） 三十二歳

一八八一年（明治一四） 三十三歳

一八八二年（明治一五） 三十四歳

一八八三年（明治一六） 三十五歳

一八八四年（明治一七） 三十六歳

一八八五年（明治一八） 三十七歳

一八八六年（明治一九） 三十八歳

一八八七年（明治二〇） 三十九歳

一八八八年（明治二一） 四十歳

一八八九年（明治二二） 四十一歳

一八九〇年（明治二三） 四十二歳

一八九一年（明治二四） 四十三歳

一八九二年（明治二五） 四十四歳



一八八五年(明治一八) 三十七歳 十二月医学教育、学校衛生取調のため自費で欧州出張。同月学士会会員に選出。裁判医学の講義も分担。

一八八六年(明治一九) 三十八歳 三月医科大学長。

一八八七年(明治二〇) 三十九歳 三月欧州より帰国。医史及び裁判医学の教授をも分担する。

一八八八年(明治二一) 四十歳 医学博士第一号に。

一八九〇年(明治二三) 四十二歳 医術開業試験委員長。医科大学長を辞任。

一八九一年(明治二四) 四十三歳 貴族院議員に勅撰される。

一八九六年(明治二九) 四十八歳 学校衛生顧問会議議長就任。

この間、学習院及華族女学校衛生に関する事務を委嘱され(明治三二)、臨時検疫局委員(明治三三)、第五回内国勸業博覧会審査官(明治三六。明治二八に次ぎ)に就任。

一九〇三年(明治三六) 五十五歳 初の東京帝國大學名誉教授の名称を授けられる。

この間、盲啞其他特殊児童教育取調委員(大正一)、臨時薬業調査委員(大正三)、中央衛生会委員(大正四及八)、保健衛生調査会委員(大正五)、学校衛生会委員(大正五)、水産食品及缶詰品評会審査顧問(大正七)、女子学習院衛生に関する事務委嘱(大正八)、学校衛生調査会委員(大正一一)。大正五年、勲二等瑞宝章を賜る。

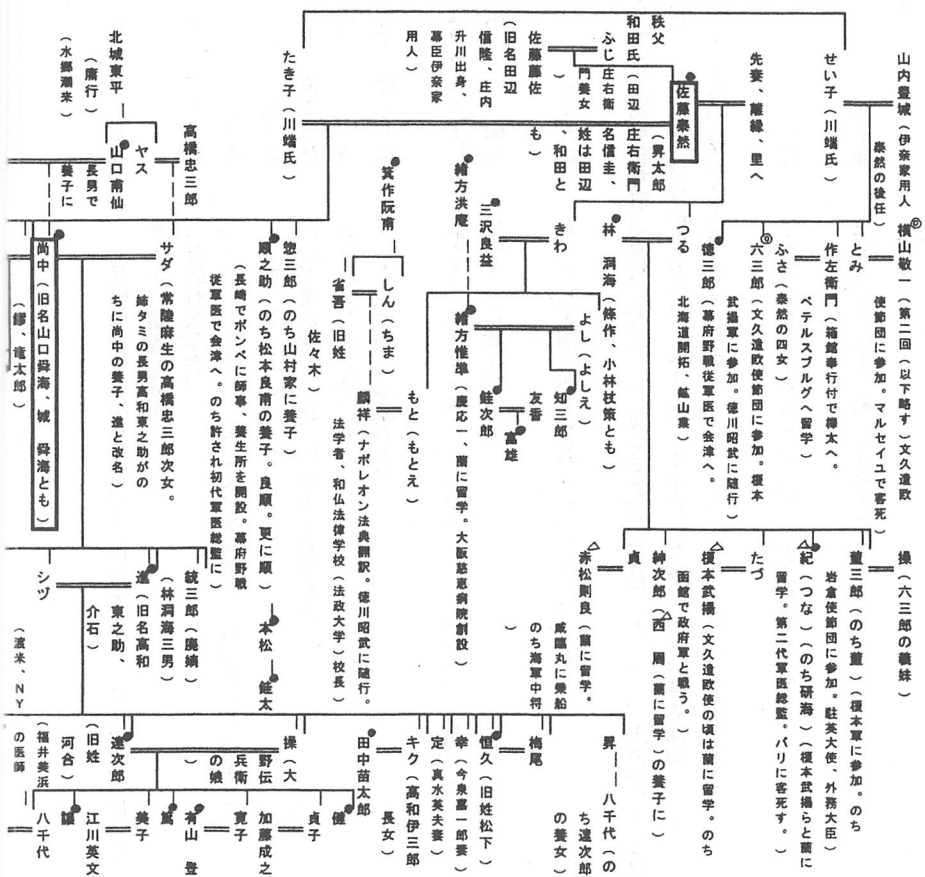
一九二二年(大正一一) 七十四歳 学習院及女子学習院衛生に関する事務嘱託を解かれる。

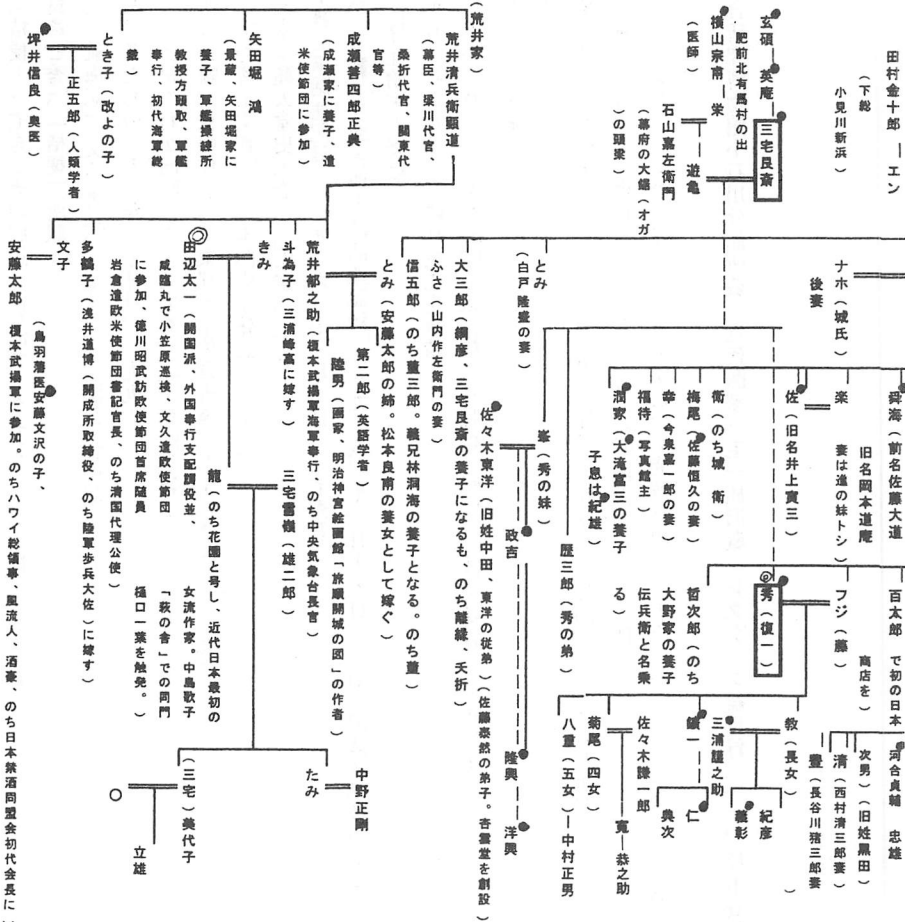
へ学制施行五十年

一九三八年(昭和一二) 九十歳 三月十六日逝去。勲一等瑞宝章を賜る。

へ憲法発布五十年

関連系図





● : 医師    ◎ : 第2回文久遣欧使節団参加    △ : 第1回幕府留学生

参考文献

- (1) 福田雅代編『桔梗―三宅秀とその周辺』、岩波ブックセンター信山社、一九八五
- (2) 酒井シヅ「良斎と秀」、『桔梗』所収
- (3) 三浦義彰『文久航海記』、冬至書林、一九四一。篠原出版復刻、一九八八
- (4) 三浦義彰『医学者たちの一五〇年』平凡社、一九九六
- (5) 三浦義彰「二十世紀のわが同時代人―三宅秀」、『千葉医学雑誌』七六卷五号、二〇〇〇
- (6) 三浦義彰「西の長崎、東の佐倉」、『東邦大学佐倉看護専門学校講義録』一九九一
- (7) 三浦義彰「三宅秀博士文書」、『日本医学雑誌』、一九四一
- (8) 学校法人順天堂『順天堂史上巻』、順天堂、一九八〇
- (9) 『維新史料編纂会講話速記録』(一九二六、十二月二日)「三宅秀君」
- (10) 『加越能時報』所載「三宅秀博士談話速記録」(一九〇八、十二月十五日)〔旧金沢藩英学校の沿革〕「余が英語学修の順序と加州藩に禄仕始末の概略」
- (11) 三宅秀「陸軍省ニ対スル話・高嶋秋帆先生事蹟」
- (12) 三宅秀「大正五年三月二十日泰然翁贈位報告祭当日脱稿―贈位を受けた植林、佐藤両家について」
- (13) 「三宅秀略歴」(三宅家蔵)
- (14) 「三宅秀日記」
- (15) 道家達将「黎明期の日本の生化学」(上代皓三編『近代の生化学』、化学同人、一九六八所収)
- (16) 松井繁『近代鍼灸教育の父―奥村三策の生涯』、森ノ宮医療学園、二〇〇四
- (17) 藤尾直史「三宅コレクションの世界」、『東京大学総合研究博物館ニュース』二〇〇二年第一七号所載「第8回新規収蔵品展について」
- (18) 東京大学総合研究博物館小石川分館所蔵「近代医家三宅一族旧蔵コレクション総目録(一)」、標本資料報告第五八号、

- (19) 井上宏生『日本人はカレーライスがなぜ好きなのか』、平凡社新書、二〇〇〇
- (20) 鈴木明『維新前夜―スフィンクスと三十四人のサムライ』、小学館、一九八八
- (21) 鈴木明『追跡―一枚の幕末写真』、集英社、一九八四。集英社文庫、一九八八
- (22) 司馬遼太郎『胡蝶の夢』、新潮社、一九七九。新潮文庫、一九八三

〔本稿は平成十七年六月二十五日、東京港区白金の北里大学薬学部コンベンションホールで行われた第一〇六回日本医史学会学術総会における招待講演Ⅱの内容をまとめたものである〕

## The Youth of Dr. Hiizu MIYAKE and His Acquaintance with Teachers and Friends

Kyounosuke SASAKI

As the great-grandson of Miyake Hiizu, through the introduction from my grandmother Kikuwo, his fourth daughter, I was invited to present a special invited lecture (with the same title as this paper) at the 106th General Meeting of the Japan Society of Medical History. This paper is based on that lecture. Hiizu was born in 1848 as the eldest son of Miyake Gonsai and was given the name of Fukuichi. From an early age, in accord with Gonsai's ambitious educational plans, he studied English, physics, medicine, and science. In 1863, at the age of fifteen, he visited Europe as a member of the European Mission. The photograph of him taken in front of the Sphinx is famous. He died in 1938 at the age of ninety. This paper discusses such matters as the social environment in which he lived during his boyhood, the process of his education, his friends and acquaintances, and his studies and life after the Meiji Restoration of 1868. I discuss Hiizu as an individual and his circumstances by drawing from materials provided by a relative Miura Yoshiaki, various types of reference materials, and my own information as his great-grandson. I have also appended an abbreviated personal chronology and a genealogy that I have worked up.